

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

On Focus Antipassive Constructions in Classical Yucatec Maya

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004138

古典ユカテクマヤ語の逆受動についての一考察

八 杉 佳 穂*

On Focus Antipassive Constructions in Classical Yucatec Maya

Yoshiho YASUGI

In Classical Yucatec Maya, spoken in Yucatan, Mexico from the 16th to the 17th centuries, the focus antipassive voice is used: (1) when the agent of a transitive sentence is in focus, (2) when the agent is questioned, (3) when the agent is negated, and (4) when the agent is relativized. It is marked with -ic (incompletive), - ϕ -i (completive), and bin...-ic (potential), deleting the ergative person marker (Set A) cross-referenced to the agent.

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1. はじめに | 4. 古典ユカテクマヤ語にみられる焦点化 |
| 2. 主語に照応する人称標識を欠く文について | 逆受動 |
| 3. 逆受動 | 5. 考察 |
| | 6. おわりに |

1. は じ め に

ユカテクマヤ語は、メキシコのユカタン半島で、現在約80万人の人によって話されている言語であるが、征服後まもなくアルファベットの表記が採用され、文法書や辞書のほか、年代記、嘆願書、土地文書、遺言書などが記された [八杉 1985]。それゆえ、ほかのマヤ諸語と比べると、比較的たくさん資料が残っている。そのうち17世紀

* 国立民族学博物館第2研究部

Key Words : Yucatec Maya, antipassive, relative clause, Chilam Balam of Chumayel
キーワード: ユカテクマヤ, 逆受動, 関係節, チュマイエルのチラムバラム

までの言語は以後のものといろいろな点で異なる¹⁾。このため、古典ユカテクマヤ語またはコロニアル・ユカテクマヤ語と称され、区別されることがある [McQuown 1967; YASUGI n.d.; SMAILUS 1989]。

古典ユカテクマヤ語の資料のなかで代表的な資料のひとつに、19世紀の写本であるが、『チュマイェルのチラムバラムの書』がある。それを分析している際に、通常では動詞に義務的に生起するはずの人称表示がつかない文がたくさんあることに気がついた。本論では、これはいったいなぜなのかを、他のマヤ諸語やユカテクマヤ語の現存する最初の文法書であるコロネルの文法書（1620）を参考にしながら考察する [CORONEL 1929(1620)]。

2. 主語に照応する人称標識を欠く文について

ユカテクマヤ語の特徴のひとつとして、いわゆる主語と目的語にあたる語が、動詞句内で人称接辞／接語として義務的に生起する現象を挙げることができる。それゆえユカテクマヤ語はいわゆる抱合言語に分類されうる言語といえるが、抱合性は、以下に示すように、それほど強くない。

- 1) 古典ユカテクマヤ語と現代ユカテクマヤ語の違いはいろいろ挙げられようが、たとえば文法的には、コロネル時代（1620）にあった予言未来 -om は、すでにベルトラン（1746）時代にはなくなっていたことや、根他動詞の未然相の -Vb はベルトラン時代には派生他動詞と同様の -e に変わりつつあったことを挙げておこう。語彙的には、ユカテクマヤ語の最初の辞典であるモトッル辞典（1600年頃）の語彙の5分の1が失われたという [ANDRADE 1955: iv]。
- 2) 古典ユカテクマヤ語の表記は、次のような古典ユカテクマヤ語の表記に従う。詳しくは八杉 [1985] 参照。

p t tz ch c
pp th dz ch' k
b

s x h
m n l
u y
i e a o u

現代ユカテクマヤ語、並びにその他の言語の表記は Academia de Lenguas Mayas の表記に従う。

p t tz ch tx k q
p' t' tz' ch' tx' k' q' '
b'

s xh x j h
m n ng
l r
i e a o u ii ee aa oo uu

(1) in men-t-ah-ø silla ti padre [CORONEL 1929: 15]²⁾

A1 作る-TV-COMP-B3 椅子 PREP 父³⁾

「私は父のために椅子を作った」

(2) bin in men-t-e-ø xanab [CORONEL 1929: 15]

FUT A1 作る-TV-POT-B3 靴

「私は靴を作ろう」

(3) lic y-il-ic-ø-ob ek ox-tul ahau-ob, ca cilmac-hi y-ol-ob

PRES A3-見る-INCOMP-B3-PL 星 3-NUC 王-PL そして 喜ぶ-PAST A3-魂-PL

「3人の王達は星を見ながら、喜んだ」[CORONEL 1929: 32]

3) 形態素に対する略号は次の通りである。

A1	: pronominal series A (ergative), first person	人称 A 1 人称
A2	: pronominal series A (ergative), second person	人称 A 2 人称
A3	: pronominal series A (ergative), third person	人称 A 3 人称
ANTI	: antipassive	逆受動
B1	: pronominal series B (absolutive), first person	人称 B 1 人称
B2	: pronominal series B (absolutive), second person	人称 B 2 人称
B3	: pronominal series B (absolutive), third person	人称 B 3 人称
CAUS	: causative	使役
COMP	: completive	完全相
DEF	: definitive	限定詞
FEM	: feminine marker	女性標識
FOC	: focusizing particle	焦点化分詞
FUT	: future	未来
HAB	: habitual	習慣
INCOMP	: incompletive	不完全相
MASC	: masculine marker	男性標識
NC	: noun classifier	名詞分類詞
NEG	: negative	否定
NUC	: numeral classifier	数分類詞
OBL	: oblique	斜格
PASS	: passive	受動
PAST	: past	過去
PL	: plural	複数
POT	: potential	未然相 (可能相)
PP	: past participle	過去分詞
PREP	: preposition	前置詞
PRES	: present	現在
REAL	: realis	現実相
REL	: relational suffix	関係化接尾辞
RP	: relative pronoun	関係代名詞
TER	: terminal suffix	終端接尾辞
THV	: thematic vowel	根母音調和音
TOP	: topicalization	焦点化
TV	: transitivizer	他動詞化接尾辞
-	: morpheme break	形態素分離標識
=	: clitic break	接語分離標識

例文では、3つの基本的時相である完全相、未然相（可能相）、不完全相の例を挙げたが、(1)と(2)は、動詞 *men-t*「作る」に、主語を表わす1人称の *in* と、目的語の「椅子」と「靴」にあたる人称接辞 *-ø* がついているとみなすことができる。(3)は、*-il*「見る」という動詞に、動詞句外の主語である「3人の王」と目的語である「星」に照応する人称接辞 *y-... -ob* と *-ø* が義務的に生起して、2重に主語と目的語が表わされている。ただし3人称単数目的語にあたる接辞はないので、表層的には義務的とはいえないが、その他の人称との関係から零形態素 *-ø* を仮定すると、義務的に生起するとみなすことができる。

動詞に義務的に生起する人称には、下に挙げるように、人称 A (ergative) と人称 B (absolutive) がある。そのほか、古典ユカテクマヤ語の人称標識には、強調の場合や間接目的語として使われる独立人称がある。

	人称 A		人称 B		独立人称	
	単数	複数	単数	複数	単数	複数
1 人称	<i>in/u-</i>	<i>ca/c-</i>	<i>-en</i>	<i>-on</i>	<i>ten</i>	<i>ton</i>
2 人称	<i>a/a u-</i>	<i>a/a u-...-ex</i>	<i>-ech</i>	<i>-ex</i>	<i>tech</i>	<i>tex</i>
3 人称	<i>u/ y-</i>	<i>u/y-...-ob</i>	<i>-ø/(-i)</i>	<i>-ob</i>	<i>lay</i>	<i>loob</i>

(人称 A の 2 つの異なる形態素は、子音初頭幹／母音初頭幹の前に生起する形)

他動詞の場合は、主語は人称 A で、目的語は人称 B で表わされる。しかし自動詞の場合、不完全相では人称 A が使われ、完全相と未然相の場合は人称 B が使われる。自動の完全相の場合、他動の目的語と同じ人称で示されるので、能格言語といえるが、不完全相の場合は人称 A が用いられ、相の違いで人称が変わるので、ユカテクマヤ語は分裂能格言語といえよう。なお人称 A は所有接辞としても用いられる。

人称 A と人称 B は動詞に義務的につくものであるが、義務的であるはずの人称接辞／接語が生起しない場合がある。『チュマイェルのチラムバラムの書』を分析しているときに会った例を少し取り出してみよう [GORDON 1913: 2]。

(4) *ca tun tal-i Chacte Aban chacte-t-ic u lub-ob,*

そして それから 来る-B3 チャクテ アバン 探す-TV-INCOMP A3 休み場所-PL

「そしてそれから休み場所を探すチャクテアバンが来た」

- (5) *ca tal-i Uac-hab-nal hoch-xiu-t-ic u lub-ob,*
 そして 来る-B3 ワクハブナル 引き抜く-草-TV-INCOMP A3 休み場所-PL
 「そして休み場所の草を抜くワクハブナルが来た」
- (6) *tamuk u tal-el Miscit Ahau mis-t-ic u lub-ob,*
 その間 A3 来る-INCOMP ミスキット アハウ 掃除-TV-INCOMP A3 休み場所-PL
 「休み場所を掃除するミスキットアハウが来ている間に」
- (7) *tamuk u tal-el y-ah ppis-ul u lub-ob,*
 その間 A3 来る-INCOMP A3-MASC 測る-AG A3 休み場所-PL
 「休み場所を測る人がやって来ている間に」
- (8) *heklay coch lub c=u ppis-ci*
 それは 広い 場所 HAB-A3 測る-PAST
 「それは彼が測った広い場所であった」

ここで *tali* と *talel* は、「来る」という意味を表わす動詞の完全相と不完全相形である。不完全相の *talel* には人称 A の 3 人称単数形 *u* がついて、主語である *Miscit* と照応している。これに対して、*tali* という完全相の 3 人称の場合、*-i* がついている。これはもともと相を表わすものであったと思われるが【八杉 1980: 142】、1 人称、2 人称と比べると、それらと同じ分布を取るので、3 人称の役割を果たしているともみることができる。しかし人称 B は他動詞の目的語としても使われ、目的語が 3 人称単数の場合は *-ø* であるので、3 人称単数は *-ø* にする必要がある。また、上の *tali* の場合は、*-i* がついているが、*-i* がついたりつかなかったりする場合もある。それも *-i* が本来人称を表わすものではないことを示している。共時的には 3 人称の人称と認めて差し支えないが、以上のことから上の人称の表では括弧に入れることにした。なお *u lub-ob* の *u...-ob* は人称 A の 3 人称複数であるが、これは所有を表わす。

先に記した 4 つの文のそれぞれの主語には、*chactetic u lubob* とか *hochxiutic u lubob* などがかかっている。これはいわゆる関係節にあたるものとみることができる。これらの関係節内の動詞は他動詞である。それゆえ、主語と目的語を表わす人称 A と人称 B がつくはずである。ところがこれらの文には人称標識は生起しない。

一方最後の文 (8) の *heklay coch lub c=u ppis-ci* も関係節 *c=u ppis-ci* を内包している。しかしこちらは主語を表示する人称 A の 3 人称形の *u* が関係節内に生起している。

これらの文を比べてみると、人称接辞／接語が生起しない場合と生起する場合の違

いは、いわゆる先行詞が、関係節の主語となっているか、目的語になっているかの違いであることに気づく。関係節の主語が先行詞になっている場合は、主語を表わす人称接辞／接語が省略され、関係節の目的語が先行詞になっている場合は、主語を表わす標識が生起する。これらの文を見る限りでは、このような規則を立てることができる。

しかし上4つの文は、意味の上からは、「チャクテアバンがかれらの休み場所を探しに来た」とか「ワクハブナルがかれらの休み場所を草抜きにやって来た」という訳も可能である。そうすると、関係節ではなく、不定詞のような役割を果たすために人称接辞／接語がないという解釈も成り立つように思われる。実際そのような訳が現存するユカテク語最初の文法書であるコロネルの文法書にみられる。

(9) pay tupil hadz-ic paal lo [CORONEL 1929: 27-28]

呼ぶ 警吏 たたく-INCOMP 子供 その

“Llama a un tupil (alguacil), para que azote ese muchacho”

「その子をたたくために警吏を呼べ」

ところがその他のマヤ諸語と比べてみると、やはりこれは関係節とみるべきである。焦点化逆受動が用いられる関係節であり、これの追究が本論の主題である。

逆受動は、我々対格言語を操るものには、なかなか理解できない能格言語特有の現象であり、そこでまず逆受動というところから話を進めることにする。

3. 逆 受 動

逆受動 (antipassive) というのは、受動の逆という意味で付けられた名前であろうが、何が逆かを説明しないと、わかりにくい名称である。そこで受動と逆受動の違いから始める。

他動詞	目的語	主 語	
↓	↓	↓	
態の変化	焦点化		= 受動
態の変化		焦点化	= 逆受動

他動詞文の2項のうち、目的語を取り立てるため、目的語を主語に変え、動詞の態を受動態に変えるとする。動詞は1項動詞となり、自動詞の一種となる。これに対して主語を取り立てるために動詞の態を変えるとする。目的語を焦点化するために動詞の態を変えたものを受動と称するのなら、主語を焦点化するために動詞の態を変えたものは、逆受動と呼んでみようということになったものと思われる [cf. DIXON 1979: 119]。

主語を焦点化し、動詞を自動詞扱いにすると、当然のことながら目的語は必要なくなる。これが絶対逆受動 (absolute antipassive, absolute voice と呼ばれていた) である。ところが動詞は自動詞の扱いを受けるが、目的語をそのまま残す場合もある。これが焦点化逆受動 (focus antipassive, agentive voice, agentive antipassive) である。目的語が不定であったり、動詞の中に取り込まれると、抱合逆受動 (incorporating antipassive, incorporative voice) となる。

マヤ諸語に関する文献で最初に能格のことや逆受動が主題として取りあげられ発表されたのは、1978年のことと思われるが [ENGLAND 1978] (1976年にすでに Smith-Stark が3つの論文で扱っているが、[SMITH 1976] 以外は未発表)、1981年になると、Dayley [1981] や Mondloch [1981] により、マヤ諸語全体の逆受動について、まとめることができるようになった。もちろんその当時、用語はまだ統一されていなかったが、その現象についてはかなりよく理解されるようになっていた。本論に必要な焦点化逆受動を中心に、その後の研究も参考にしながら、簡単に述べておこう。

1) 絶対逆受動

目的語または受益者がわからないときや非関与の時、または話者が触れたくないときに用いられる。動詞は自動詞扱いとなるので、当然のことながら、人称 B が用いられる。

キチェ語 [LARSEN 1988: 468]

(10) ka-ø-nim-a-n-ik

INCOMP-B3-大きい-THV-ANTI-TER

「彼は従う」

(11) k-in-loq'-o-n-ik

INCOMP-B1-愛する-THV-ANTI-TER

「私は愛する」

ケクチ語 [DAYLEY 1981: 20]

(12) x-at-b'is-o-k

COMP-B2-測る-ANTI-REAL

「君は測った」

(13) x-in-ch'iila-n

COMP-B1-叱る-ANTI

「私は叱った」

2) 焦点化逆受動

他動詞の行為者を際立たせ強調するため、行為者が焦点化されるとき、行為者が疑問文化されるとき、行為者が関係節化されるときなどがある。行為者名詞句はたえず動詞の前に生起する。他動の意味を保持しているが、人称 A は生起せず、人称 B だけである。人称 B は目的語標識として用いられている。アカテク語の例を引いてみよう [LARA MARTÍNEZ 1994: 62, 65]。

疑問文

(14) maj x-ach il-on-i

誰 COMP-B2 見る-ANTI-TER

「誰が君を見た」

(15) maj x-ach maq'-on-i

誰 COMP-B2 たたく-ANTI-TER

「誰が君をたたいた」

焦点化

(16) ha'-ø naj x-ach il-on-i

FOC-B3 NC (彼) COMP-B2 見る-ANTI-TER

「彼が君を見た」

(17) ha'-ø naj x-ach maq'-on-i

FOC-B3 NC (彼) COMP-B2 たたく-ANTI-TER

「彼が君をたたいた」

関係節

- (18) x-ø-w-il naj x-ach maq'-on-i
COMP-B3-A1-見る NC COMP-B2 たたく-ANTI-TER
「君をたたいた人を私は見た」

- (19) x-ø-in-maq' kam no' mis x-ø-il-on no' tx'ow
COMP-B3-A1-殺す NC 猫 COMP-B3-見る-ANTI NC 鼠
「鼠を見た猫を私は殺した」

否定

- (20) k'am-ø maj x-ach il-on-i
NEG-B3 誰 COMP-B2 見る-ANTI-TER
「誰も君を見なかった」

- (21) k'am-ø maj x-ach maq'-on-i
NEG-B3 誰 COMP-B2 たたく-ANTI-TER
「誰も君をたたかなかった」

ここで -ach は人称 B の 2 人称形であり, -on は逆受動化接尾辞, -i は終端接尾辞である。

平叙文でいわゆる主語となるものが焦点化される場合逆受動となるのであるが, 焦点化するものが目的語の場合, 下の例のように逆受動にならない。そして動詞は他動のままである。人称 A が主語, 人称 B が目的語に照応する。

- (22) maj x-ø-in-maq'-a
誰 COMP-B3-A1-たたく-TER
「私は誰をたたいたか」
- (23) ha'-ø no' tx'ow ix-ø-y-il no' mis
FOC-B3 NC 鼠 COMP-B3-A3 NC 猫
「鼠を猫が見た」
- (24) ha'-ach x-ø-in-maq'-a⁴⁾
FOC-B2 COMP-B3-A1-たたく-TER
「君を私がたたいた」

4) この文は目的語が 2 人称にもかかわらず, 人称 B が生起していない。おそらく ha'-ach が名詞と扱われて, 3 人称扱いになっているものと思われる。

- (25) x-ø-in-maq' kam no' tx'ow ix-ø-y-il no' mis

COMP-B3-A1-殺す NC 鼠 COMP-B3-A3-見る NC 猫

「私は猫が見た鼠を殺した」

- (26) k'am-ø x-ø-in-maq'-a

NEG-B3 COMP-B3-A1-たたく-TER

「私は誰もたたかなかった」

マヤ諸語は、人称標識レベルにおいて、自動の主語と他動の目的語がともに人称 B で表わされる、すなわち同じ扱いを受ける能格言語であることはすでに述べた。上の例は文レベルにおいても能格性が発揮されていることを示している。すなわち、関係節では主語はそのままの形で関係節化できず、逆受動にして自動詞化されなければならない。

2つの他動詞文が関係節化する例を挙げてみよう [MONTEJO ESTEBAN 1994: 118-121]。

- (27) max s-tz'ib'e naq winaq tx'an un

COMP B3-書く NC 男 NC 本

「その男は本を書いた」

- (28) max w-il naq winaq ewi

COMP A1-見る NC 男 昨日

「私はその男を昨日見た」

これはカンホバル語の例であるが、この2つの文を関係節でつなぐと次のようになる。

- (29) ewi max w-il naq winaq max tz'ib'-on tx'an un

昨日 COMP A1-見る NC 男 COMP 書く-ANTI NC 本

「昨日私は本を書いた男を見た」

naq winaq は関係節の主語であり、関係節内の動詞は -on という逆受動形となっている。関係節化する場合は他動詞は自動詞と同じ扱いを受けなければならないのである。これに対して次の文では、naq winaq は関係節の目的語であるので、関係節内の動詞は他動詞のままである。他動詞はそのままということは、目的語は自動の主語と同じ

扱いを受けるからである。

- (30) naq winaq max w-il ewi max s-tz'ib'e naq tx'an un
 NC 男 COMP A1-見る 昨日 COMP A3-書く NC NC 本
 「昨日私が見た男は本を書いた」

ちなみに、この文も主語を焦点化できる。その場合 tz'ib'-e は逆受動化され、tz'ib'-on となる。

- (31) naq winaq max w-il ewi, ha naq max tz'ib'-on tx'an un
 NC 男 COMP A1-見る 昨日 FOC NC COMP 書く-ANTI NC 本
 「私が昨日見た男が、本を書いた」

自動詞文と他動詞文の関係節化を挙げると、さらによくわかつく。

- (32) max w-il naq winaq
 COMP A1-見る NC 男
 「私はその男を見た」
- (33) max telk'oj naq winaq ewi
 COMP こける NC 男 昨日
 「その男は昨日こけた」

2つの関係節ができるが、下例の(34)の関係節は自動詞文の主語であるのでそのままである。(35)の文も目的語が関係節化しているので、関係節内の動詞はそのままである。

- (34) max w-il naq winaq max telk'oj ewi
 COMP A1-見る NC 男 COMP こける 昨日
 「私は昨日こけた男を見た」
- (35) max telk'oj naq winaq max w-il ewi
 COMP こける NC 男 COMP A1-見る 昨日
 「昨日私が見た男がこけた」

このように他動詞の行為者はそのままの形で焦点化できないという制限がある。焦点化する場合は、逆受動という形を取らなければならない。逆受動とは自動化のひとつであり、人称 B の扱いである。人称 B が照応する目的語がそのままであることは、自動の主語と他動の目的語が同じ扱いを受けることと同じであり、文レベルでも能格性が発揮されているといえることができる。

焦点化文について、マヤ諸語を見渡すと、興味深いことに、マークされる人称標識は、a) 目的語が人称 B で表示される言語と、b) 目的語が斜格で表示される言語と、c) 人称標識に階層性がある言語がある。

a) 目的語が人称 B で表示される

- (36) in kat q'os-on axh [AYRES 1991: 158]

私 REC たたく-ANTI B2

「私が君をたたいた」(イシル語)

- (37) mak xk-ach maq-n-i [CRAIG 1977: 14]

誰 COMP-B2 たたく-ANTI-TER

「誰が君をたたいたか」(ハカルテク語)

b) 目的語が斜格で表示される

- (38) laa'at x-at-tz'ap-o-k w-e [STEWART 1980: 81]

あなた COMP-B2-閉じこめる-ANTI-REAL A1-OBL(〜に)

「あなたが私を閉じこめた」(ケクチ語)

- (39) re' tz'i' x-ø-hoy-w-ik r-e winaq [BROWN 1979: 123]

DEF 犬 COMP-B3-咬む-ANTI-TER A3-OBL(〜に) 男

「その犬が男を噛んだ」(ボコムチ語)

c) 人称標識に階層がある

- (40) inin x-in-ch'ey-ow-i jar aachi [DAYLEY 1985: 349]

私 COMP-B1-たたく-ANTI-TER DEF 男

「私がその男をたたいた」

- (41) jar aachi x-in-ch'ey-ow-i [DAYLEY 1985: 349]

DEF 男 COMP-B1-たたく-ANTI-TER

「その男が私をたたいた」

(42) jar iixox-ii' x-ee-ch'ey-ow-i jar aachi [DAYLEY 1985: 349]

DEF 女-PL COMP-B3PL-たたく-ANTI-TER DEF 男

「その女達はその男をたたいた」

(43) jar aachi x-ee-ch'ey-ow-i jar iixox-ii' [DAYLEY 1985: 349]

DEF 男 COMP-B3PL-たたく-ANTI-TER DEF 女-PL

「その男がその女達をたたいた」

(40) ～ (43) はいずれもツトゥヒル語の例であるが、非 3 人称 > 3 人称複数 > 3 人称単数という階層性に従って、動詞句内の人称がマークされている。(40) と (41) では行為者が「私」であろうと、「その男」であろうと、動詞句内の人称表示は人称 B の 1 人称形の -in である。(42) (43) は 3 人称複数と単数の場合であり、どちらの場合も 3 人称複数形の人称 B の -ee が使われている。ちなみに行為者、被動者が 1, 2 人称の場合、被動者は斜格で表わされる。

(44) inin x-in-ch'ey-o aw-xiin [DAYLEY 1985: 350]

私 COMP-B1-たたく-ANTI A2-OBL

「私が君をたたいた」

(45) atet x-at-ch'ey-o w-xiin [DAYLEY 1985: 350]

君 COMP-B2-たたく-ANTI A1-OBL

「君が私をたたいた」

3) 抱合逆受動 Incorporating Antipassive

ケクチ語 [DAYLEY 1981: 20]

(46) x-at-yok'-o-k si'

COMP-B2-切る-ANTI-REAL 薪

「君は薪切りをした」

(47) x-ø-a-yok' li si'

COMP-B3-A2-切る DEF 薪

「君は薪を切った」

(46) は逆受動の例で、人称は人称 B の -at が使われ、「薪」 si' は非限定である。これに対して、(47) は他動詞文であり、人称 A の -a- が使われている。そして「薪」

には限定詞 *li* がついている。逆受動では目的語が非限定であることが必要である。つまり「薪切り」という一般的な行為を表わす場合に使われる。

ユカテクマヤ語の場合でも、ケクチ語のように限定詞は使われなくても、他動詞の場合は限定的な意味があるのに対し、逆受動では非限定である。

現代ユカテクマヤ語 [BRICKER 1978: 15-16]

(48) *k=in ch'ak-ik che' ichil in kòol*

PRE-A1 切る-INCOMP 木 の中 A1 畑

「私の畑で私は木を切る」

(49) *t=in ch'ak-ah che' ichil in kòol*

PAST-A1 切る-COMP 木 の中 A1 畑

「私の畑で 私は木を切った」

(50) *k=in ch'ak-che' ichil in kòol*

PRE-A1 切る-木 の中 A1 畑

「私の畑で私は木を切る」

(51) *ch'ak-che'-nah-en ichil in kòol*

切る-木-ANTI-B1 の中 A1 畑

「私の畑で私は木を切った」

(52) *k=in ch'ak-che'-t-ik ichil in kòol*

PRE-A1 切る-木-TV-INCOMP の中 A1 畑

「私の畑で木を切る」

(48) と (49) は他動詞文の不完全相と完全相である。「木」には限定詞がついていないが、「その木」とか「ある木」とかという限定的な意味があり、具体的である。それに対し、(50) と (51) は逆受動の例である。であるから、こなれない訳であるが、「木切りをする」とでもいえるもので、どの木であるか限定性はない。

ユカテクマヤ語の場合、ケクチ語と異なり、不完全相の場合、相を表わす接尾辞がつかないだけであるが、完全相の場合、*-nah* がつき、*che'* が動詞句内に取り込まれてしまうことがはっきり形の上からわかる。

目的語が動詞に取り込まれ、抱合逆受動となった形を、もう一度他動詞化すると、(52) の文になる。これは第2章で挙げた(5)の *hoch-xiu-t-ic* と同じ形式である。

4. 古典ユカテクマヤ語にみられる焦点化逆受動

コロネルは行為者が前置される場合の活用について次のような例文を挙げている
[CORONEL 1929: 27]。

(53) mac cam-bes-ic-ech

誰 学ぶ-CAUS-INCOMP-B2

「誰が君を教える」

(54) mac bin cambes-ic-ech

誰 FUT(行く) 教える-INCOMP-B2

「誰が君を教えるのだろうか」

(55) mac cam-s-i palal-ob

誰 学ぶ-CAUS-B3/COMP 子供-PL

「誰が子供達を教えたのか」

(56) mac hadz-ech

誰 たたく-B2

「誰が君をたたいたか」

これらは前章でみた焦点化逆受動が疑問文に使われている例といえよう。

次の文は行為者を強調した焦点化逆受動の例である。

(57) dios xac-i u chi-ob

神 養う-B3/COMP A3 口-PL

「神が彼らの口を養った」

焦点化逆受動のうちに、関係節が含まれることを先にみたが、それにあたるものもコロネルにみられる。そのひとつは第2章で示したが(9), もう一度記すことにする。

(58) yacun dios tzen-t-ic-ech

愛する 神 養う-TV-INCOMP-B2

“Ama a dios que te sustenta”

「汝を養う神を愛せ」

(59) pay tupil hadz-ic paal lo

呼ぶ 警吏 たたく-INCOMP 子供 その

“Llama a un tupil (alguacil), para que azote ese muchacho”

「その子をたたく警吏を呼べ」(「その子をたたくために警吏を呼べ」)

これらは明らかに上の例文と同様な操作が動詞に施され、行為者が先行詞となった関係節である。

ユカテクマヤ語で基本的な3つの相、不完全相、完全相、未然(可能)相は接尾辞で表わされる。平叙文の他動詞の場合は、-ic, -ah, -Vb/-e/-øである。このうち-Vbは根他動詞、-e/-øは派生他動詞につく接尾辞である。この3つの時相は、焦点化文では、上の例からわかるように、異なっている。この3つの相は、古典文法家のいう現在(presente)、完了過去(pretérito perfecto)、不完了未来(futuro imperfecto)にあたる。3つの基本時制ともいえるもので、それぞれ単に現在、過去、未来ということにして、下の表では、相の後に括弧に入れて示すことにする。

	平叙文	焦点化文
不完全相(現在)	-ic	-ic
完全相(過去)	-ah	-i/-ø
未然相(未来)	bin...-Vb/-e/-ø	bin...-ic

平叙文の不完全相として、上では-icを与えたが、コロネルは4つある動詞の活用形の現在形について、次のような形を与え、-icを利用していない。少し脱線するが、このことについて考えておきたい。

(60) cambesah in cah 「私は教える／教えている」(第2活用)

(61) tzic in cah 「私は従う」(第3活用)

(62) canan in cah 「私は守る」(第4活用)

しかし、過去 (pretérito perfecto) と未来 (futuro imperfecto) の例は、-ah と -Vb/-e/-ø である。

- (63) in cam-bes-ah 「私は教えた」(第2活用)
- (64) bin in cam-bes-ø 「私は教えるだろう」
- (65) in tzic-ah 「私は従った」(第3活用)
- (66) bin in tzic-ib 「私は従うだろう」
- (67) in canan-t-ah 「私は守った」(第4活用)
- (68) bin in canan-t-e 「私は守ろう」

実は(60)～(62)の動詞は他動詞ではない。過去形は cambesah-nah-en, tzic-nah-en となるものであり、例文(51)にみられる -nah と同じものが使われる。これをペルトランは absoluto といっている [BELTRAN 1859: 46]。目的語をもたない形であり、まさに本論で問題にしている逆受動形である。それゆえ不完全相(現在形) -ic は文法家のいうところを採用したものではないことを断っておかねばなるまい。ちなみに第1活用は自動詞 (nac-al in cah「私は昇っている」, nac-en「私は昇った」, bin nac-ac-en「私は昇るだろう」) である [CORONEL 1929: 7-12]。

ところがコロネルは、別のところで、他動詞の活用として、完了過去の -ah を -ic に変えれば、現在形ができ、未来形はそれに bin を前置することで得られるとしている。その例として次のような文がみられる [CORONEL 1929: 24]。

- (69) bal u chun a hadz-ic a ch'uplil
 何 A3 根本 A2 たたく-INCOMP A2 女
 「なぜおまえは妻をたたくのか」
- (70) bal u chun bin a hadz-ic
 何 A3 根本 FUT A2 たたく-INCOMP
 「なぜおまえはたたくとするのか」
- (71) bal u chun a hadz-ci
 何 A3 根本 A2 たたく-COMP
 「なぜおまえは妻をたたいたのか」

(72) bal u chun a cocin-t-ici a yum

何 A3 根本 A2 侮辱する-TV-COMP A2 父

「なぜおまえは父親を侮辱したのか」

(73) bal u chun t=a hadz-ci

何 A3 根本 PAST-A2 たたく-COMP

「なぜおまえは妻をたたいたのか」(今日過去)

この違いはなにか。上の例文をよくみると、(69)～(73)は疑問詞(名詞)が前置しているのに対し、(63)～(68)ではそうではないところが異なる。(69)～(73)は逆受動文と同じように、名詞や疑問詞が前置される文であるのに対し、(63)～(68)は平叙文ではないかと考えられる。

平叙文とは違う形式を取る動詞の形をここで依存形ということにすると、その相辞は次のようにまとめることができる。根他動詞と派生他動詞では少し異なるので分けた。

	根他動詞	派生他動詞
現在(不完全相)	-ic	-ic
過去(完全相)	-ci	-ici
近(今日)過去	t...-ci	t...-ici
未来(未然相)	bin...-ic	bin...-ic

-ic は動作がまだ終わっていない状態を示す不完全相の接尾辞と考えられるが、現代ユカテクマヤ語では、-ik(註2の約束に従って -ic は -ik と表記する)が用いられる文は、いずれも動詞の前に分詞が生起している。

(74) k inw il-ik hwàan

"I see John"

(75) táan inw il-ik hwàan

"I am seeing John"

(76) tz'ó'ok inw il-ik hwàan

"I finished seeing John"

(77) táant inw il-ik hwàan-e'

"I just saw John"

(78) hó'op' inw il-ik hwàan

"I began to see John"

(79) káah inw il-ik hwàan

"I began to see John"

(80) yàan inw il-ik hwàan

"I must see John"

- (81) *taak inw il-ik hwàan* “I am anxious to see John”
 (82) *k’ab’éet inw il-ik hwàan* “I need to see John”
 (83) *hé’el inw il-ik hwàan* “I will see John”
 (84) *k-in-h il-ik hwàan* “I am going to see John”

[Po’ot YAH and BRICKER 1981: viii-ix]

これら最初に生起する分詞のうちいくつかは、古典ユカテクマヤ語では、次にみるように、まだ動詞であったことがわかる。

- (85) *hopp-i in beel-t-ic* [CORONEL 1929: 30]
 始める-B3 A1 する-TV-INCOMP
 「私はし始めた」
 (86) *u tan a beel-t-ic helelae* [CORONEL 1929: 32]
 A3 している（の中？） A2 する-TV-INCOMP いま
 「いま実際おまえはやっているのか」

すなわち *-ic* が使われる文はすべて依存形であると推測できる。興味深いことに、コロネルは、4つの動詞活用形の現在形に、(60)～(62)に挙げたように、動詞を前置して、その後人称 *A+cah*（「する、起こる」という不規則動詞）を置いた文を挙げて、賢明にも、*-ic* を用いていない。もっともこれらは他動詞（*activos*）ではないもの（*absolutos*）を他動詞の活用としているわけで、本来の他動詞がどのように活用したかはなぜか例がない。

古典ユカテクマヤ語の3大文法家と数えられるコロネル（1620）とサンブエナベントゥラ（1684）はほぼ同じ形を挙げているのであるが、ベルトラン（1746）は、他動詞の現在形に次のような形を与えている。

- (87) *ten cam-bes-ic* 「私は教える」
 (88) *ten tzic-ic* 「私は従う」
 (89) *ten canan-t-ic* 「私は守る」

これは独立代名詞 *ten* と動詞幹に *-ic* をつけた形である。本論で問題にしてきた焦点化逆受動形である。過去が *in cambes-ah* であれば、現在は *in cambes-ic* になるであろ

う予想される形はどこにも見あたらない。

ロベス・オテロ（1914）の時代になると、強調のために使われる独立人称が前置されているだけで、(74)の現代ユカテク語と変わらなくなる。現在形の出現といってよいかもしれない。もっともこの形はすでにベルトランにみられる。

(90) ten c=in han-t-ic [LÓPEZ OTERO 1914: 49]

私 HAB=A1 食べる-TV-INCOMP

「私は（それを）食べる」

(91) ten cam-bes-ic ~ ten cin cambesic [BELTRAN 1859: 55]

「私は（それを）教える」

これらの例からわかるように、-ic が生起する場合には、必ず動詞の前になにかの要素が出現する。それゆえ本論では -ic を平叙文の不完全相（現在形）としたが、本来は動作が終わっていない状態を示す相辞であり、動詞の依存形につけられるものであったと考えるべきであろう。

平叙文に使われるものとは異なる相接尾辞をつける動詞を依存形としたが、その相接尾辞を手がかりに、コロネルが挙げた例文を検討すると、疑問詞や副詞が動詞の前に生起する場合や、いわゆる従属節に生起する場合の動詞形として使われていることがわかる。依存形を使った例は、たとえばコロネルが *romances subintelectos* として挙げている例文にも見いだされる。現在と未来で同じ相接尾辞 -ic が使われているし、動詞の前に名詞や疑問詞が生起している。

(92) tac kaan in kax-ic in cuch

差し入れる ひも A1 くくる-INCOMP A1 荷

「私の荷をくくるひもをくれ」

(93) bal a hadz-ci a ch'uplil

何 A2 たたく-PAST A2 女

「何でおまえは妻をたたいたのか」

(94) lay cuchillo bin a cim-s-ic keken

それ ナイフ FUT（行く） A2 死ぬ-CAUS-INCOMP 豚

「それは豚を殺すナイフです」

これらの文の先行詞は、逆受動が使われる関係節と異なり、手段や道具などを表わすものであり、関係文の主語ではない。しかし、動詞には、逆受動とよく似た接尾辞が使われている。焦点化逆受動の場合は、主語を表わすマーカがないこと、過去形が異なることも大きな違いである。これらの違いが決定的な差なのか、現在のところよくわからないが、平叙文とは異なり、動詞の前になにかが生起する形は共通しており、両者が関係することは間違いないであろう。

ちなみに、マヤ諸語の西で話されているミヘ語やソケ語でも、動詞が依存か独立かで活用が異なる現象がみられ [たとえば SCHOENHALS 1979], またマヤ諸語の中でも、たとえばマム語では、依存節において、主語、目的語がともに人称 A で示され、平叙文とは異なる人称標識が用いられる現象がみられる [ENGLAND 1983: 262]。平叙文とは異なる仕掛けをもつことがあるのは珍しいことではないが、ユカテクマヤ語ではこれまで見逃されてきたといつてよい。依存形は調べてみると、いろいろなところに使われており、興味深い問題がたくさんある。それゆえ両者の関係については、別稿で扱うことにしたい。

少し横道にそれたが、焦点化逆受動として挙げた相接尾辞に戻りたい。-ic の問題で挙げたことから推測できるように、コロネルの文法書は、ラテン語文法にあわせて書かれたものであり、ユカテクマヤ語に一般的でないものも無理矢理つくり出した可能性がある。そこでコロネルの文法書に挙げられ、焦点化逆受動とみたものと同じ文法形式をもつものが実際の文にもみられるのか、『チュマイェルのチラムバラムの書』から例を引いてみよう。なお例文の後の鍵括弧で括った数字は、Gordon 版のページを表わす [GORDON 1913]。

関係節

- (95) ti ix cul-an yax balam y-okol kin uk-ic u kikel-e [29]

そして また 座る-PP 緑 ジャガー A3-上 太陽 飲む-INCOMP A3 血-TER

「そして血を飲む緑のジャガーが太陽の上に座っている」

- (96) he ix yaax balam lic u kat-ab-al y-okol

それ また 緑 ジャガー PRES A3 尋ねる-PASS-INCOMP A3-上

uk-ic u kikel-e, lay yaax ic balam yan-i-e [29]

飲む-INCOMP A3 血-TER それ 緑 トウガラシ ある-TER-TER

「尋ねられたその上で血を飲む緑のジャガーとは、緑のトウガラシである」

- (97) ca tun xic ti caclam pix t=u tan halach uinic
 そして それから 行け PREP 膝 PREP=A3 中 真 人
kat-ic ti-e [34]
 望む-INCOMP PREP-TER
 「そしてそれからそれを望む真の人の前に跪いていけ」
- (98) ichil Buluc Ahau tii ca hok-i Ah Mucencab *kax-ic*
 の中 11 アハウ そこ 時 出る-B3 アフ・ムセンカブ 縛る-INCOMP
u uich-ob Oxlahun-ti-ku [42]
 A3 目-PL オシュラフンティクター
 「11アハウの時、オシュラフンティクターの目を縛るアフ・ムセンカブが出てきた」
- (99) tii tun ca hok-i Ix Haulah Nichte *oc-s-ic*
 そこ それから とき 出る-B3 イシュハウラフニクテ 入る-CAUS-INCOMP
u keban Bolon-ti-ku [46]
 A3 罪 ボロンティクター
 「そしてそれからボロンティクターを罪に陥れるイシュ・ハウラフ・ニクテが出てきた」
- (100) likin-ba-il u hol y-otoch Don Juan Montejo *oc-es-ø* christiano-il
 東向き A3 入口 A3-家 フアン・モンテホ 入る-CAUS-COMP キリスト教
uay ti peten lae, Yucal peten, Yucatan lae [54]
 ここ PREP ペテン これ ユカルペテン, ユカタン これ
 「この地ユカルペテン, ユカタンにキリスト教をもたらしたフアンモンテホ様の家の入口は東向きである」

これに対して、参考までに先行詞が目的語の場合を挙げると、下例のように、行為者の人称 *u* が現われている

- (101) he ix u yax kikel y-ix mehen lic *u kat-ic* lo-e,
 これ また A3 最初 血 A3-FEM 子 PRES A3 望む-INCOMP それ-TER
lay maya ci-e [36]
 それ マヤ 酒-TER
 「彼が望む娘の最初の血とは、マヤの酒である」

疑問文

- (102) mac *bin naat-ic-ob* ch'abtan kintan-ob ti y-ahaulil-i [64]
 誰 FUT 知る-INCOMP-PL 節制-PL PREP A3-支配-TER
 「誰が支配に節制を理解するのであろう」

行為者焦点化

- (103) ua ma a man-s-ic-ex-e,
 もし NEG A2 過ぎる-CAUS-INCOMP-B2PL-TER
 tex-i bin kux-ic u chun che yetel xiu [64]
 汝ら-TOP FUT かじる-INCOMP A3 根本 木 そして 草
 「もし汝らが先に立たないなら、汝らは木と草の幹をかじるであろう」
- (104) ten-i bin luk-s-ic-ech ti mascab [66]
 私-TOP FUT 引き出す-CAUS-INCOMP-B2 PREP 牢屋
 「私がおまえを牢獄から救うであろう」
- (105) he mac bin tzic-ic-e, dios-il u cah t=u than [33]
 これ 誰 FUT 従う-INCOMP-TER 神-REL A3 する PREP=A3 言葉
 「従うものはその言葉に従って神となる」

否定文

- (106) ma-mac nuc-ic in than [49]
 NEG-誰 応える-INCOMP A1 言葉
 「誰も私の言葉に応えない」

これらの例から、コロネルが文法書で記述した文例と同じ文法関係を示す文が、実際の文書でもみられることが裏付けられた。これらの例からわかるように、ユカテクマヤ語では、主語となる人称が接辞／接語で示される必要がない。高地マヤ諸語にみられる焦点化逆受動と同じ役割を果たす文法形式をもつが、逆受動を表わす特別な形態素は不要である。しかし通常文とは異なる相接尾辞がつく。これに対して高地マヤ諸語では、逆受動のマーカである -w や -on などがつく。

5. 考 察

高地マヤ諸語では、確かに逆受動を表わす接尾辞がついて、自動詞に必要な人称 B がつき、紛れもなく逆受動であることが形の上からわかる。しかしユカテクマヤ語で

は、他動詞文に必要な人称 A が無いものの、不完全相では平叙文と同じ接尾辞がついて、形の上から逆受動ということが理解できない。実際不定詞のような訳がみられた。しかし考えてみれば、先行詞が主語であるか目的語であるかの区別がつけばいいのであって、それは人称 A のあるなしで区別がつくので、別に逆受動のための特別な接尾辞を必要としないといってよい。ところが平叙文とは異なった相接尾辞がついている。これはなぜか。

ここで Nichols が提唱した head marking languages (主一標識言語) と dependent marking languages (従一標識言語) という、言語を2つに分けた分類を利用して、考えてみよう [NICHOLS 1986]。

主と従とはなにかを示すため、日本語とユカテクマヤ語について、まず名詞が2つ現われる所有関係の文を挙げる。

(107) 太郎の本

(108) u huun Pedro

A3 本 ベドロ

「ベドロの本<彼の一本一ベドロ」

「太郎」と「本」の関係は「太郎」が「本」を修飾しているので、「太郎」が従で、「本」が主である。その修飾関係は、従の「太郎」に「の」がついて示される。一方ユカテクマヤ語の場合、主の「本」に「彼の」を表わす u がつき、ベドロにはなにもつかない。それゆえ日本語は従一標識言語であり、ユカテクマヤ語は主一標識言語といえる。

では単純な他動詞文ではどうか。

(109) 太郎は次郎をたたいた。

(110) t=u y-il-ah-ø Pedro Juan

PAST=A3 A3-見る-COMP-B3 ベドロ フアン

「フアンはベドロを見た」

日本語では「太郎は次郎をたたいた」というように「太郎」や「次郎」にマークがつく。これに対してユカテクマヤ語の場合、u y-il-ah-ø にみられるように、動詞の方にマークがつく。u y- が行為者を表わす3人称単数人称 A で、-ø は非動作者=目的語

を表わす3人称単数人称 B である（すでに述べたように、目的語のあたる3人称単数はふつう表わされないで零形態素 -Ø で示した）。

文の場合、中心になるのは動詞（句）であることは誰もが認めるところであろうが、どれが主でどれが従であるかは、2つの名詞の修飾関係のように判然としない。しかし常識的にみて、動詞が主であることは異論なかろう。日本語は名詞の修飾関係において、従一標識言語であったように、他動文でも従一標識言語である。これに対し、ユカテクマヤ語は、動詞の方にマークがついているので、主一標識型の言語である。

行為者を強調する場合、日本語では、「太郎が次郎をたたいた」と「が」にするか、あるいは「が」を強めて言う（または語順を変えて「次郎をたたいたのは太郎である」）。あくまで従の方にマークがつき、主である動詞は変化しない。これに対して、仕組みとして逆の主一標識型の言語であると、動詞の方に何らかのマークをつけざるを得ないはずである。それが逆受動またはそれに類する仕掛けが必要なわけと思われる。ユカテクマヤ語の場合は、相接尾辞を通常の文のそれとは異ならすことで、表現しているといえるのではなかろうか。

日本語は従の方にマークがつき、主である動詞は変化しないといったが、「次郎は太郎にたたかれた」というように、動詞にもマークがつけられるという見方が成り立つかもしれない。しかしこれは受動である。態（voice）の変化が起こっている。態というのはどのような文法範疇か、それは定義によって異なるが、一般的には、第3章の最初に示したように、「どの項を際立たせ、どの項を目立たなくするか」という文法的機能を表わすものであろう。しかしいま逆受動ということを知りよくするために、かなりかたよった定義になるが、動詞と項の関係の変化に注目した文法範疇が態としてみよう。すると、受動というのは、ふつう、いわゆる目的語が主語になり、主語が斜格になる現象をさす。動詞と項の関係が変化している。これに対して逆受動というのは、主語と動詞の関係は変わらないので、この定義に従うと、態ではないということになる。何が変わっているかという、焦点の置場所である。焦点を動詞から取り除く仕掛けが逆受動ということになる。

逆受動ということばが誤解を生むものになっている。逆受動とは受動の逆で、目的語を省略した形といいながら、例文（53）～（59）をみてもわかるように、目的語が存在する文も焦点化逆受動としてきた。受動の逆という見方が、こうした矛盾を生むものになったと思われる。

逆受動の研究が最初に進んだ高地マヤ諸語では、動詞句内の辞順は、次のようになる。

(111) 時相—B(目的語)—A(主語)—他動詞

(112) 時相—B(主語)—自動詞

例文 (14) ～ (21) をみてもわかるように、逆受動形も、たとえ目的語があったとしても、自動詞構文と同じ形式を取る。それゆえ形の上からは自動詞扱いの文となるので、問題は露呈しない。

しかしながら、ユカテクマヤ語の場合は、能格言語の高地マヤ諸語と異なり、分裂能格である。

(113) A—他動詞—B

(114) A—自動詞 (不完全相) / 自動詞—B (完全相)

例文 (53) ～ (59) は、形式的には、いずれも X (動詞に先立つ名詞や疑問詞など) + 動詞—相—B であり、むしろ主語となる標識を省いた例としかみえない。そうすると逆受動という定義に反することになる。

ではどのように考えたらいいのか。焦点化逆受動とみてきた例文は、いずれも動詞の前に何らかの要素が置かれている。また依存形とみた動詞の場合も、同様に前に何らかの要素が置かれている。文における働きという観点からみると、平叙文では、主—従の関係からは動詞が主であるとみられるが、動詞に焦点が置かれているといってもよからう。焦点ということばが不適当なら、文におけるもっとも大事な伝達項目といいかえてもよい。これに対して、焦点化逆受動の文では、前におかれた要素に焦点が移り、動詞は非焦点化されている。力点が動詞から前におかれた要素に移っている。平叙文における主役から、脇役に降格しているといいかえてもよからう。つまり、文における動詞への焦点化をはずす役目が、逆受動や依存形とみた動詞にある。これがどうやら本質的な役目と考えられる。

もちろん、「太郎が次郎をたたいた」という文で、「たたいた」というところが一番重要な伝達項目だとは思うのであるが、どの要素も等分に重要であり、優劣に差がないとみることもできる。それが平叙文というものであろうが、その場合でも、「太郎が」にスポットを当てると、当然のことながら、動詞への光のあたり具合は暗くなることは間違いない。つまり動詞の役目は平叙文より下がる。それが逆受動とみた動詞になるのではなからうか。

どこかに焦点を当てると、その他の部分は暗くなる。主役はひとりでよく、残りは

脇役に回ることになる。これはどうも人間の本質に根ざす機構のひとつのように思われる。それが言語に適用されると、逆受動や依存形といった文法化になるのであろう。これを文における動詞の伝達重要度から言い直すと、動詞の降格 (demotion of the verb) または減価 (devaluation of the verb) となるのではなかろうか。

この結論はいろいろなところに応用がききそうである。英語の単純な文に応用してみよう。

(115) He hits you

(116) He can hit you

例 (115) は「たたく」という動作がもっとも大事な伝達項目と考えられる。これに対して例 (116) は、「たたく」というより、「できる」ということが大切な伝達要素のように思われる。*can* は助動詞という術語のもとに範疇わけされているため、とかく付属的な役目を果たすようにみられがちであるが、(116) の文における重要度からみると、*hit* より *can* である。文における伝達項目の重要性が、動詞 *hit* から *can* に移ったとみてよいだろう。そのために、動詞の原形を使って区別したという解釈が成り立つ。これはあくまでも動詞とその他の要素の文における伝達の重要性という観点からの解釈である。動詞が文における主役か脇役かという点に注目すると、このような見方が許されるのではなかろうか。

逆受動や依存形の機能をみて、動詞の文における役割の差というものが文法化されるのではないかということを考え、それを動詞の降格または減価現象となづけたのであるが、もちろんこれは仮説である。当然のことながら言語により、それを文法化する言語としない言語があることが予想される。また文法化に際しても、どこまでを範囲とするか異なるであろう。たとえば英語では、関係代名詞は人と物で違い、また主格や目的格などでも変化するが、関係節の動詞は平叙文と変わらない。一方ユカテクマヤ語では、この仮説はかなり有効と考えられるが、たとえば *ca* (「～のとき」) の場合は平叙文の動詞形であるのに対し、*bal u chun* (「なぜ」) のときは依存形であり、語によって異なる大変おもしろい問題を包含している。それゆえ、この検討は別稿にゆずりたい。

最後にマヤ諸語全体の逆受動について触れておきたい。逆受動といっても、マヤ諸語全体を見渡すと、たとえば焦点化逆受動をもたないチョルティ語や、焦点化逆受動と絶対逆受動を区別する言語やしない言語などがあり、変化に富んでいる。Dayley

[1981: 70] をもとに、その後の成果を加えたものを表1にした。

これを見てわかるように、逆受動といってもいろいろある。もっとも興味深いのは、絶対逆受動と焦点化逆受動が同じ場合と違う場合があることである。しかも高地西と高地東にある言語群は絶対逆受動も焦点化逆受動も同じ形態素を使うが、それぞれ異なり、マム・グループ（マム、アグアカテク、イシル）とケクチでは -on/-n であるのに対し、ポコム・グループ（ポコムマム、ポコムチ）では -w/-n である。それに対して、真ん中にあるキチェ・グループ（サカプルテク、キチェ、カクチケル、ツトゥヒル）では絶対逆受動と焦点化逆受動が異なる形態素で表わされている。しかも絶対逆受動ではマム・グループ、ケクチと同じ -on/-n 形、焦点化逆受動ではポコム・グルー

表1 逆受動を表わす接尾辞

言語	絶対逆受動	焦点化逆受動	抱合逆受動
ユカテク ¹⁾	-V~-nah	-ik~-ø	-ø~-nah
チョルティ ²⁾	-on~-ma		
チョンタル ³⁾	-n		
ツォツィル ⁴⁾	-van~-on	-van~-on	
ツェルタル	-awan		
トホラバル	-wan~-wun		
チュフ	-waj	-an	-w
アカテク ⁵⁾		-on	
ハカルテク	-wa	-n	-w
カンホバル ⁶⁾	-waj	-on	
マム	-(VV)n	-(VV)n	-(VV)n
アグアカテク	-oon/-Vn	-oon/-Vn	
イシル	-on/-n	-on/-n	
ケクチ	-o/-n	-o/-n	-o/-n
ポコムマム	-w/-in	-w/-in	
ポコムチ	-w/-Vn	-w/-Vn	
サカプルテク ⁷⁾	-(V)n	-Vw/-n	
キチェ	-oon/-Vn	-ow/-Vn	
カクチケル	-on/-n	-o/-n	
ツトゥヒル	-oon/-Vn	-ow/-Vn	-o/-n

根他動詞／派生他動詞

¹⁾ BRICKER 1981, ただし焦点化逆受動は本論による。古典ユカテクマヤ語では -ik は -ic と表記される。

²⁾ PÉREZ MARTÍNEZ 1994

³⁾ KNOWLES 1984

⁴⁾ HAVILAND 1981

⁵⁾ LARA MARTÍNEZ 1994

⁶⁾ MONTEJO ESTEBÁN 1994

⁷⁾ DuBois 1981

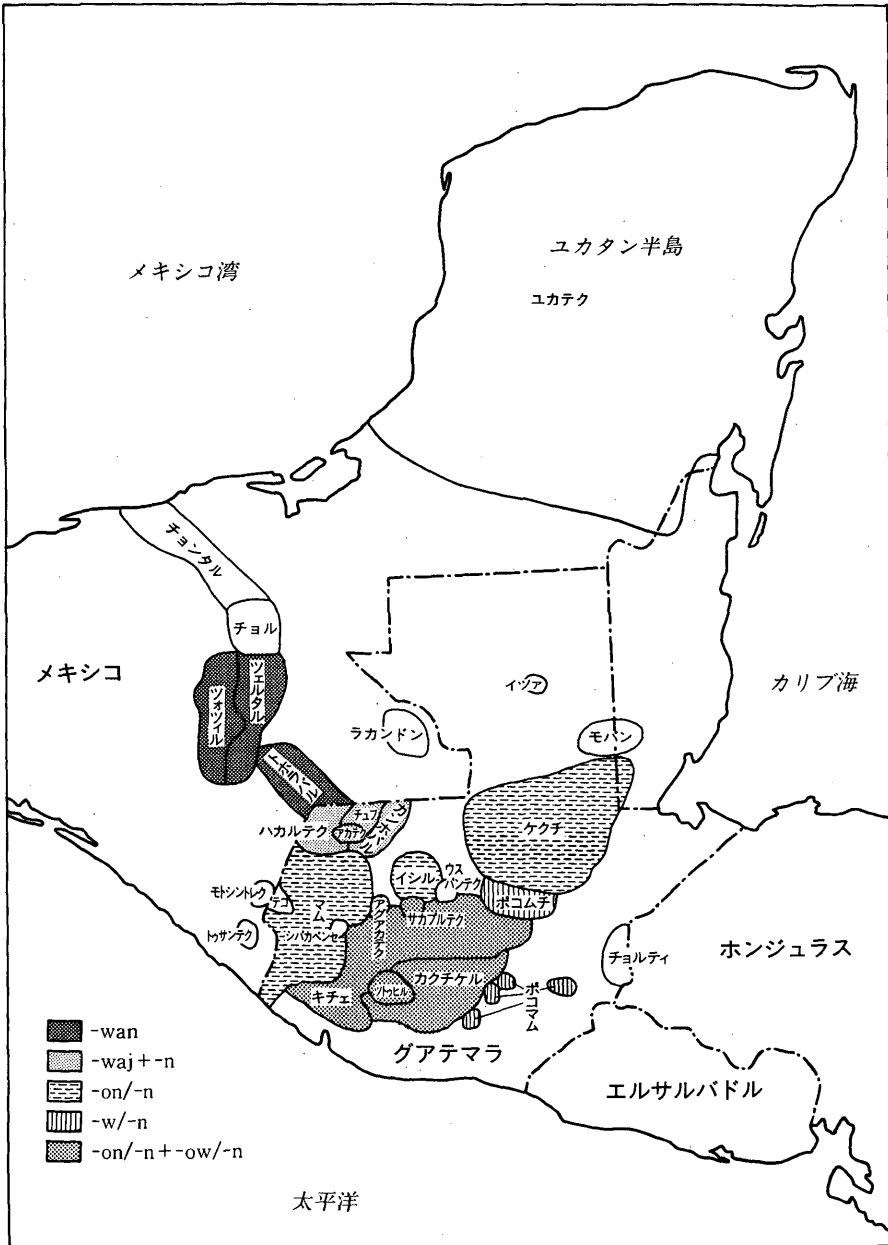


図1 マヤ諸語の逆受動を表わす形態素の分布

プと同じ -w/-n 形である。

この違いはなぜか。理論的には、1) もともと絶対逆受動も焦点化逆受動も同じ形であった、2) 絶対逆受動と焦点化逆受動は異なる形であった、の2つが考えられる。1) の場合、1a)-wan と -on の両方をもっていた、1b)-on/-Vn であった、1c)-w/-n であった、の3つが考えられる。2) の場合、2a) 絶対逆受動は -w/-n で焦点化逆受動は -on/-n と、2b) 絶対逆受動は -on/-n で焦点化逆受動は -w/-n、の2つの可能性がある。このうち、1b) であるとするとなぜ -w/-n が出てきたか説明できないし、1c) であると、なぜ -on/-n がでてきたか説明できないから、1b, 1c は考えられない。2a) であると、マム・グループ等では、焦点化逆受動に体系化したとみることができるし、ポコム・グループでは逆に絶対逆受動の形に体系化したとみればよい。しかし、キチェ・グループの -on/-n と -ow/-n は説明しがたい。2b) であると、キチェ・グループはそのまま保存しているとみ、マム・グループは絶対逆受動の形に体系化し、ポコム・グループは、焦点化逆受動の形に体系化したとみればよい。しかしチュフヤハカルテクなどの説明に困る。そうすると、全体を説明できるのは、1a) の -w 系と -n 系があったという仮説である。-w 系と -n 系は、意味的に何らかの差があったから共存していたと思われるが、それがどうであったかはわからない。しかしそれが言語によって統一整理されていったことで、いろいろなタイプになったとみると、もっとも納得できる。しかしながら、これとてマヤ諸語全体を説明できない。ユカテクマヤ語ではどう説明すればよいのであろう。 Choltei 語ではどう説明すればよいのであろう。

Choltei 語では焦点化逆受動というものがない。文レベルでは対格言語である。

(117) e ihch'ok u-k'ay-e'n

DEF 子供 A3-叱る-B1

「子供が私を叱った」

(118) e ihch'ok xe' u-k'ay-e'n mari' u-k'ab'a'

DEF 子供 RP A3-叱る-B1 マリ A3-名前

「私を叱った子はマリアという名である」

(119) e ixik u-choni e yutir

DEF 女 A3-売る DEF 果物

「女は果物を売る」

- (120) e ixik xe' u-choni e yutir-ob' u-yahk'u uy-er
 DEF 女 RP A3-売る DEF 果物-PL A3-たたく A3-息子
 「果物を売る女は息子をたたいた」
 [PÉREZ MARTÍNEZ 1994: 146-147]

逆受動がない代わりに、関係代名詞の役割をする *xe'* が生起している。

以下3つの例文は最初の語が焦点化されているが、いずれも動詞は他動詞であり、変化はない。

- (121) e chehchte' u-b'ehru e pak'ab'-ob'
 DEF トラック A3-運ぶ DEF 人-PL
 「トラックが人を運ぶ」
 (122) maha'x e chehchte' u-b'ehru e pak'ab'-ob
 NEG DEF トラック A3-運ぶ DEF 人-PL
 「人を運ぶのはトラックではない」
 (123) maha'x pak'ab'-ob' u-b'ehru e chehchte'
 NEG 人-PL A3-運ぶ DEF トラック
 「トラックが運ぶのは人ではない」
 [PÉREZ MARTÍNEZ 1994: 149]

Choltey 語の特異な点は、基本語順が SVO であることと関係しているのかもしれない。マヤ諸語の基本語順は VSO または VOS であり、動詞が最初に生起する。それゆえ、S を前に出す焦点化という現象は特徴的になるのであるが、Choltey 語ですでに S は前に出ている。これは精密に検討する価値がある問題であるが、もしこの現象と関係あるとするなら、SVO というのはのちの発展とみられるから、Choltey 語では焦点化逆受動が失われたとみる方が適当であろう。

しかしながら、表1をみると、マヤ諸語に逆受動が最初から備わっていたとみる仮説自体を疑うことも可能である。逆受動は高地マヤで発達し、それが周りに拡散していったとみると、2b で十分である。表1では、Chol-グループやツェルタル・グループでデータがはっきりしなかったが、拡散が不徹底であるとする、その理由もわかる。しかし形式は異なるが、高地マヤの逆受動と同じ様な役割を果たすユカテクマヤ語の例はどのように説明すべきであろうか。

逆受動といっても、その形式にはいろいろな形がみられた。それは動詞句の差に関係するのかもしれない。ユカテクマヤ語では、動詞句内の辞順は、主語—他動詞—相辞—目的語に対し、キチェ語では相辞—目的語—主語—他動詞といった違いがみられる [八杉 1980; YASUGI 1995: 117]。そうした辞順の差が関係するのかもしれない。また、キチェ・グループでは、自動の主語は他動の目的語と同じ人称標識をもつ純粋な能格性を示すが、その他のグループでは能格性を示すとはいえ、ユカテクマヤ語や Chol 語のように、相で分裂したり、Mocho 語のように、人称で分裂したり、Mam 語やアグアカテク語のように、従属節で分裂する、分裂能格性を示す。そうした能格性に関係するのかもしれない。能格性と逆受動を改めて考察する必要があるが、本論ではここまでにしたい。

6. お わ り に

ユカテクマヤ語の焦点化逆受動は、形態素として特別なものがつかないため、これまで同定されなかった。本論では、他のマヤ諸語からみて、これが焦点化逆受動というものを探して、それを焦点化逆受動形とした。それは不完全相では、-ic、完全相では、-ø/-i、未然（可能）相では、bin...-ic であった。これらの形態素は、平叙文とよく似た形態素であるため、そしてまたその他のマヤ諸語と大きく異なっているため、焦点化逆受動として認識されてこなかったように思われる。これらはマヤ諸語の構造的な同型性から導かれたものではなく、機能的な観点から導かれたものである。すなわち、焦点化名詞の次に来る動詞句の辞順は、高地マヤ諸語の、時相—人称 B—動詞—焦点化接尾辞という順に対して、ユカテクマヤ語では、動詞—時相接尾辞±人称 B という違いがみられる。逆受動を表わす形態素も異なっている。このように異なるにもかかわらず、行為者の焦点化、疑問文化、関係節化、否定文化で、機能的に同等な逆受動がみられたのである。

高地マヤ諸語では、焦点化逆受動を表わすものとして、-on/-n、-w/-n などの接尾辞が時相辞に関係なくあった。それゆえ、もし焦点化接尾辞を高地マヤ諸語のように探すとすると、-# として、それに時相辞の -ic、-ø/-i、bin...-ic がついたとすべきかもしれない。高地マヤ諸語にみられる焦点化逆受動と同じ機能を果たすものとして、不完全相では、-ic、完全相では、-ø/-i、未然（可能）相では、bin...-ic というものがある。この時相辞は、平叙文とは似ていても異なるものであった。それだからこそ、焦点化逆受動の役目を果たしているといえよう。

本論では、古典ユカテクマヤ語に焦点化逆受動とみられる形式があり、それらは他のマヤ諸語の形と大きく異なっていたことをみた。文法的な機能は同じであるが、その構造も、それをなう形態素も異なっていた。これは文法形式と内容の問題に発展する。

機能からみると、逆受動というのは、文における動詞の伝達役割の重要度を下げる手段と考えられ、逆受動ということばがあまりふさわしくないことも指摘した。

マヤ諸語を見渡すと、逆受動といってもいろいろあった。マヤ諸語に本来逆受動が備わっていたのかという疑いも出た。いろいろ問題は広がってきたが、それらは改めて考えてみたい。

謝 辞

影山太郎関西学院大学教授、本館の崎山理教授、長野泰彦教授、加藤昌彦助手から有益な助言をいただき、手直しできたことを感謝を込めてここに記しておきたい。改善できなかったところや欠陥があるとすれば、それはもちろん筆者の責任である。

文 献

ANDRADE, Manuel J.

1955 *A Grammar of Modern Yucatec*. Microfilm Collection of Manuscripts on Middle American Cultural Anthropology, No. 41, University of Chicago Library.

ARZÁPALO MARÍN, Ramón

1995 *Calepino de Motul: Diccionario Maya-Español*. 3 Vols. Universidad Nacional de Autónoma de México.

AYRES, Glenn

1991 *La gramática Ixil*. Antigua Guatemala: CIRMA.

BARRERA VÁSQUEZ, Alfredo (ed.)

1980 *Diccionario Maya Cordemex*. Mérida: Ediciones Cordemex.

BELTRAN, Pedro

1859(1746) *Arte del idioma maya*. Mérida: Imprenta de J. D. Espinosa.

BRICKER, Victoria R.

1978 Antipassive Constructions in Yucatec Maya. In Nora England (ed.), *Papers in Mayan Linguistics*, Studies in Mayan Linguistics No. 2, University of Missouri Miscellaneous Publications in Anthropology, No. 6, Department of Anthropology, University of Missouri-Columbia, pp. 3-24.

1981 The Source of the Ergative Split in Yucatec Maya. *Journal of Mayan Linguistics* 2(2): 83-127.

BROWN, Linda Kay

1979 Word Formation in Pocomchi (Mayan). Ph.D. dissertation, Stanford University.

CORONEL, Juan

1929(1620) *Arte en lengua de maya recopilado y enmendado*. In Juan Martínez Hernández (ed.), *Diccionario de Motul Maya Español*, Mérida: Talleres de la Compañía Tipográfica Yucateca, pp. 2-53.

- CRAIG, Colette Grinevald
1977 *The Structure of Jacaltepec*. University of Texas Press.
- DAYLEY, Jon P.
1981 Voice and Ergativity in Mayan Languages. *Journal of Mayan Linguistics* 2(2): 3-82.
1985 *Tzotujil Grammar*. University of California Publications, Linguistics Vol. 107, University of California Press.
- DIXON, R. M.
1979 Ergativity. *Language* 55(1): 59-138.
- DUBOIS, John William
1981 The Sacapultec Language. Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.
- ENGLAND, Nora
1983 *A Grammar of Mam, a Mayan Language*. University of Texas Press.
- ENGLAND, Nora (ed.)
1978 *Papers in Mayan Linguistics*. Studies in Mayan Linguistics No. 2, University of Missouri Miscellaneous Publications in Anthropology, No. 6, Department of Anthropology, University of Missouri-Columbia.
- GORDON, G. B.
1913 *The Book of Chilam Balam of Chumayel*. University of Pennsylvania.
- HAVILAND, John Beard
1981 *Sk'op sotz'leb-el tzotzil de San Lorenzo Zinacantan*. Universidad Nacional Autónoma de México.
- KNOWLES, Susan Marie
1984 A Descriptive Grammar of Chontal Maya (San Carlos Dialect). Ph. D. dissertation, Tulane University.
- LARA MARTÍNEZ, Rafael
1994 *Estudios lingüístico sobre el kanjobal (maya)*. México: Instituto Nacional de Antropología e Historia.
- LARSEN, Thomas Walter
1988 Manifestations of Ergativity in Quiche Grammar. Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.
- LÓPEZ OTERO, Daniel
1914 *Gramática Maya*. Mérida: Tipografía La Moderna.
- MARTÍNEZ HERNÁNDEZ, Juan (ed.)
1929 *Diccionario de Motul Maya Español*. Mérida: Talleres de la Compañía Tipográfica Yucateca.
- MCCCLARAN, Marlys (ed.)
1976 *Mayan Linguistics, Volume One*. American Indian Studies Center, University of California, Los Angeles.
- MCQUOWN, Norman A.
1967 Classical Yucatec (Maya). In *Handbook of Middle American Indians, Vol. 5, Linguistics*, University of Texas Press, pp. 201-247.
- MONDLOCH, James Lorin
1981 Voice in Quiche-Maya. Ph. D. dissertation, State University of New York at Albany.
- MORTEJO ESTEBAN, Ruperto
1994 *Yunal stxolilal kotz'ib'on koti'-Manual de redacción Q'anjobal*. Guatemala: Cholsamaj.
- NICHOLS, Johanna
1986 Head-Marking and Dependent-Marking Grammars. *Language* 62: 56-119.
- PÉREZ MARTÍNEZ, Vitalino
1994 *Gramática del idioma ch'orti'*. Guatemala: Proyecto Lingüístico Francisco Marroquín.

PO'OT YAH, Eleuterio and Victoria R. BRICKER

1981 *Yucatec Maya Verbs (Hocaba Dialect)*. Center for Latin American Studies, Tulane University.

SCHOENHALS, Alvin

1979 Totontepec Mixe Stage and Event Clauses. *Discourse Processes* 2: 57-72.

SMAILUS, Ortwin

1989 *Gramática del Maya Yucateco Colonial*. Hamburg: Wayasbah.

SMITH, Thomas C.

1976 Some Hypotheses on Syntactic and Morphological Aspects of Proto-Mayan (*PM). In Marlys McClaran (ed.), *Mayan Linguistics Vol. I*, University of California, Los Angeles, pp. 44-66.

STEWART, Stephen

1980 *Gramática kekchí*. Guatemala: Editorial Académica Centro Americana.

八杉佳穂

1980 「マヤ諸語の動詞核の比較研究」『ラテン・アメリカ研究』10: 121-173。

1985 「ユカテクマヤ語の正書法の歴史——マヤ人の文字使用との関連において——」『国立民族学博物館研究報告』10(1): 93-110。

YASUGI, Yoshiho

1995 *Native Middle American Languages: An Areal-Typological Perspective*. Senri Ethnological Studies no. 39, National Museum of Ethnology.

n.d. *Análisis preliminar de los verbos del yucateco clásico*. MS (1984)